

[Report]

The present situation and related problems of the meeting of the teaching staff for study and training in our college

Yumi Hiruta*, Yoshinobu Fujita*, Manabu Ashikaga*, Fumie Ishibashi* and Midori Yao*

* Aino Gakuin College

Abstract

We examined some problems of the meeting of the teaching staff for study and training in our college, based on our experiences of chairing the committee in 2000 and 2001. The meetings have been held for the purpose of improvement in research and education in Aino Gakuin College. There have been 33 reports in 15 meetings presented in the last 2 years. The teaching staff have presented the recent research activities of their field. The trend of their studies and education activities were examined. The majority of the reports was on survey research and evaluation research, being 54.6%. Most of the survey research included teaching methods of nursing, nursing methods and medicine, being 81.8%. We found that teachers of Aino Gakuin College had diverse research methods and research themes in common. The research collaboration among them is expected.

Key words : study and training of teachers, study of nursing education

本学における教員研修の現状と課題

蛭田由美*, 藤田佳信*, 足利学*

石橋文枝*, 八尾みどり*

【要旨】 2000年度および2001年度の教員研修会の運営の経験から、本学における教員研修の課題を検討した。教員研修会は、藍野学院短期大学の看護教育の向上のために教員が相互に研鑽し合うことを目的に、教員各自が取りくんでいる教育・研究活動を報告するという形で開催した。教員研修会は、過去2年間で15回開催し、33題の報告があった。これら33題の報告から、本学教員の教育研究活動の動向を分析した。研究デザインは、調査研究と評価研究が最も多く、両者あわせて54.6%であった。研究の内容は、看護学に関するものが60.6%、医学に関するものが21.2%、その他が18.2%であった。今回の教員研修会の検討から、本学教員が多岐にわたる研究手法を持ち、また教員が共通の研究課題を持っていることが解った。今後は、学内の教員による共同研究が期待される。

キーワード：教員研修、看護学教育研究

はじめに

少子化現象が進むわが国において18歳人口の減少から、短期大学、4年制大学の受験生が減少し学生定員を割り込む大学が出現してきている。各大学ではこの問題を解決すべく生き残りをかけて大学の特色を出し、魅力ある大学創りに様々な改革がなされつつある。この改革の中に、教員の「faculty development」すなわち組織的な教育研究能力の開発があげられる(森脇道子, 1998)。

およそ専門職業にあるものは、絶えず自己啓発し、自己の専門性を高める責任があることはいうまでもない。看護師の倫理規定(日本看護協会, 1988)にも次のような条項が示されている：

倫理規定7 看護師は常に質の高い看護が提供でき

るよう個人の責任において継続学習に努める。

- 8 看護師は看護実践の水準を高め、よりよい看護ケアのために研究に努める。
- 9 看護師は人々に常に質の高い看護を提供できるよう看護教育の水準を設定し、実施する。

上記に掲げられた3項目は看護大学の教員には生涯必要な規定であり、のみならず全ての領域の大学人においても同様にあてはめる事ができる。科学の進歩や時代の変化とともに人々のニーズは多様化し、専門職業人は豊かな教養と高度な専門的能力の涵養が求められる。まして教育の任にあるものは、高い専門的能力を学生に伝える義務がある。そのために、教員は自らの専門的能力と教育力を高めることが不可欠である。

* 藍野学院短期大学

著者らは、2000年5月から2002年5月までの2年間、教員研修委員を命じられ教員研修会の運営に携わった。本報告では、2年間の教員研修会の運営の経験から、本学における教員研修の課題を検討した。

1. 本学における教員研修の現状

—— 2000年度と

2001年度における実績 ——

1) 教員研修会開催の経過

教員研修委員会は、本学運営のための委員会組織の中に定例委員会として位置づけられ、その任務は「看護教育・研究の向上および教員の人的成長を図ることを目的とする研修・集会・運営などを実施する」と明記されている。教員研修委員会は、この目的を達成するために、どのような形の教員研修を実施することが効果的であるかについて検討し、これまで教員研修会の開催を困難にしていた問題を推定した。それは次のように考えられた。

- ① 各教員の教育研究の分野が違いため、共通のテーマを掲げることが難しい。
- ② 教員は、それぞれ所属学会や外部の研究会などへの参加によって研修の機会があるため、学内での研修の必要性を認めない。
- ③ 看護教員は臨地実習の指導のため実習施設に向いているので、研修委員会は研修日程を組みにくい。
- ④ 研修委員会は各教員の研究の進行状況を把握できないため、報告者・報告内容・報告順位などを決定することに困難がある。
- ⑤ 学内で相互批判の機会を持つことはなじまない。

そこで、委員会では次のような実施要領で教員研修を運営することにした：

教員研修の目的：藍野学院短期大学の看護教育の向上のため、教員が相互に研鑽し合う。

研修の方法：各教員が現在取り組んでいる教育・研究活動を報告する。

報告内容は研修報告、教育報告、研究報告のいずれでもよい。

年に1回、自分の研究課題を研修会で報告するチャンスを持つ。

全教員の参加を原則とする。

研修会の日程：全教員が参加できるように、毎月の教員会議の後に行う。

研修会の運営：開催時間は1時間程度とする。

各回2名から3名程度の報告とし、各自の持ち時間は20分程度、質疑応答の時間を持つ。報告者は学会発表の要領でレジュメを用意する。

これを実行に移すために、まず全教員に実施要領を通知し、報告の希望日程と報告テーマを募った。教員からの希望をもとに年間計画を立て、全教員に通知した。年間計画を立てることによって、日頃の忙しい業務のなかでも計画的に準備ができるだろうと考えられた。また、研修報告では、各専門分野のカレントな情報が得られ、教員の共通の関心事にすることができると考えられた。教育報告では、日頃の教育実践のなかでの問題やその解決の方法を共有できるのではないかと考えられた。研究報告では、各教員がどのような研究テーマに取り組んでいるか知ることができ、研究方法などを自分の研究のヒントにしたり、共同研究のきっかけにすることもできると考えられた。学会報告の要領で報告を求めたのは、時間内の発表のために原稿を作ること、スライドやパワーポイントなど視聴覚機器の利用の学習、質問に対する答え方、質問の仕方など学術学会における報告の予演会のように利用したいというねらいもあった。

2) 2000年度と2001年度の教員研修会の実績

表1と表2は、2000年度および2001年度の教員研修会の期日と演者および演題を示したものである。2000年度は5回の開催で、15名の教員による14題の報告があった。まず、学長みずからトップバッターとなり範を示した。短大行事等の都合で日程が延期になったこともあり、当初の予定が後にずれ込んでいった。2001年度は10回の開催で、19名19題の報告があった。2年間で延べ33題の報告であり、33題の報告のうち、研究報告は24題(72.7%)、教育報告は5題(15.2%)、研修報告は4題(12.1%)であった。また、1回の研修会の所要時間は1時間から1時間30分程度であった。

表3は、2年間の教員研修会で報告を行った34名の教員の授業担当分野を示したものである。教員の授業担当分野は、本学カリキュラムに基づいて区分した。基礎分野は5名14.7%、専門基礎分野(医学その他)は8名23.5%、専門分野(看護学)は21名61.8%で

表4 報告の種類と研究デザイン

デザイン 種類	Review 総説	Survey research 調査研究	Evaluation research 評価研究	Historical research 歴史的研究	Case study 事例研究	Feild study 臨床研究	Methodolo- gical study 理論的研究	Others その他
研究報告 n=24	2 (6.1)	9 (27.2)	5 (15.2)	1 (3.0)	2 (6.1)	1 (3.0)	4 (12.1)	0 (0.0)
教育報告 n=5	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (12.1)	1 (3.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
研修報告 n=4	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (6.1)	2 (6.1)
合計 n=33	2 (6.1)	9 (27.2)	9 (27.2)	2 (6.1)	2 (6.1)	1 (3.0)	6 (18.2)	2 (6.1)

Polit D. F. と Hunger B. P. (1991) の分類を一部改変。() は%を表す。

表5 研究内容 n=33

分野	数 (%)	研究内容の内訳
看護学	20 (60.6)	看護学教育の実態・教授法の評価 6
		保健・看護活動の実態・評価 5
		臨地実習教授法の評価 4
		看護者および看護学生の実態 3
		海外視察調査 2
医学	7 (21.2)	医学総説 2
		安楽死法の変遷 1
		医学症例 1
		医療訴訟判例 1
		病原物質の野外調査 1
		医療倫理 (ヒト・クローニング) 1
一般	6 (18.2)	文学 2
		哲学 (自己決定権) 1
		一般の人の生活実態 1
		健常者の対処行動 1
		教授方法 1

表5は、研究内容を示したものである。研究内容は、大きく看護学、医学、一般の3つの分野に分類された。看護学に関するものは20題(60.6%)、医学に関するものは7題(21.2%)、その他一般に分類されたものは6題(18.2%)であった。看護学の中では、看護学教育・教授法、臨地実習教授法に関するものが最も多く、10題(30.3%)であった。保健・看護活動の実態・評価は5題(15.2%)で、看護者・看護学生の実態に関するものは3題(9.1%)であった。医学に関する報告は、医学研究に関する総説、医療に関する法律・判例、医学症例、病原物質の野外調査、医療倫理など多岐にわたっていた。一般に分類されたものも、医療や看護に役立てるための基礎的な研究が多かった。

2) 研究の対象および研究の場

表6は、データの種類を示したものである。一次的資料を用いた報告は18題(54.5%)で、二次的資料を用いた報告は11題(33.3%)、その他が4題(12.1%)であった。

表7は、研究対象および材料を示したものである。研究対象は、看護学生、一般大学生、看護者、患者、

表6 データの種類

	一次的資料	二次的資料	その他
研究報告 n=24	14 (42.4)	8 (24.2)	2 (6.1)
教育報告 n=5	4 (12.1)	1 (3.0)	0 (0.0)
研修報告 n=4	0 (0.0)	2 (6.1)	2 (6.1)
合計 n=33	18 (54.5)	11 (33.3)	4 (12.1)

() は%

表7 研究対象および材料 n=35

分類	数 (%)	研究対象および材料の内訳
対象	19 (54.3)	看護学生 10
		患者 3
		看護者 1
		家族・介護者 2
		一般健常者 2
		一般大学生 1
材料	16 (45.7)	理論 4
		統計資料・資料 2
		文学作品 2
		判例・法律 2
		医学研究 2
		看護・教育制度 (制度) 2
		カリキュラム 1
		病原物質 1

家族・介護者、一般健常者などであった。研究材料は、理論、統計資料・資料、文学作品、判例・法律、医学研究、看護・教育制度、カリキュラム、病原物質などであった。

研究あるいは調査の場は、看護教育施設、一般大学、医療施設、療養施設、患者・障害者の家庭、海外の医療保健福祉施設・教育施設などであった。

3) データ収集の方法

表8は、データ収集の方法を示したものである。データ収集の方法は、一次的資料を用いた報告18題のうちで、質問紙による調査法が8題(44.4%)、スケールを用いた測定法が5題(27.8%)、参加観察法が3題(16.7%)、面接法が1題(5.6%)で、1題は不明であった。

表8 データ収集の方法

n = 18	質問紙調査法	スケールによる測定	参加観察法	面接法	不明
数 (%)	8 (44.4)	5 (27.8)	3 (16.7)	1 (5.6)	1 (5.6)

*一次資料を用いた報告の内訳

4) 単独研究あるいは共同研究の別

教員研修会の報告時に提示された抄録は、殆どが演者単独の記名であったが、報告の内容から、共同研究と推測されるものもあった。

3. 他の大学・短期大学における教員研修の現状

他の大学および短期大学における教員研修はどのように行われているのか、その現状を知ることによって、本学の教員研修のあり方や運営の参考にできるのではないかと考えられた。そこで著者らは、図書館に寄贈された短期大学、大学の自己点検・自己評価報告書から、他学の教員研修の現状を調べた。図書館に寄せられた報告書は48施設からのものであったが、最新の年度の報告書から、教員研修に関連する委員会の有無、委員会の名称、教員研修の目的、活動の内容・日程などを調べた。資料1は、その結果を一覧にしたものである。報告書の編集の形態はさまざまであり、教員研修委員会の設置の有無や名称などを特定することが困難であった。空欄は、記載がないため内容を特定できなかったことを示している。これらの報告書から、看護系の大学および短期大学は、学内における教員研修活動を比較的活発に行っているように見受けられた。教員研修の目的に、「faculty development」を掲げている施設があり、教員の教育研究の能力の発展・向上、研究・ライフワークに関する相互理解、教員間の研究協力を目的とすると述べられていた。研修活動の内容は、学術研究発表会、講演会などであった。研修会の日程は、毎月行っているという施設もあったが、殆どは年に数回と決して多くない。なお、多くの施設が公開講座、地域との連携研究、地域との共催による公開講座を行っていた。

4. 本学教員研修の今後の課題

教員研修会の報告は、教員の教育研究活動のごく一部である。そのことを前提にして、2年間の教員研修会の実績から本学教員の教育研究活動の一端を概観した。

報告の演題は、教員の専門分野毎の専門性に沿って

多岐にわたり、それぞれが大変興味深いものであった。教員がそれぞれどのような研究に取り組んでいるかを知り、相互理解が深まれば、教員研修の目的の一つを達成できたことになると考える。

研究デザインはSurvey researchとEvaluation researchが最も多く、両者合わせて54.6%であった(表4)。この事実は、舟島ら(1994)が行ったわが国の看護学系学術雑誌に掲載された看護学教育研究論文の動向と同様の傾向であった。舟島ら(1994)は、この2つは看護学教育研究を代表するデザインであると述べている。本学教員研修会報告の特徴は、Methodological studyが18.2%と比較的多かったことであるが、これは主に人文科学系の教員の功績であり、その他の研究デザインで、Historical research, Case study, Field studyなどもみられたが、少数であった。南(1991)は、今後行われるべき看護研究として看護理論の検証をあげており、また、看護研究の発展の土台になるものは事例研究であるとも述べている。本学においても、今後は看護系教員によるMethodological studyやCase study, Field studyが増えることが期待される。

研究の内容は、看護学教育の教授方法、保健・看護活動、医学に関するものが殆どを占めており(表5)、報告した教員の専門分野すなわち授業担当分野の割合(表3)にはほぼ一致していた。看護学教育の教授方法(臨地実習の教授方法を含む)に関する研究が多くを占めることは、看護系短期大学の教員の研究の動向として当然のことであり、教員が共通の研究課題を持っていることを示している。人文科学系の教員の報告の中でも、医学に関する題材をあつかったものが多かった。報告に当たって教員各自が、参加教員共通の討論になるように、報告のテーマを選んだものと考えられる。「藍野学院短期大学の看護教育の向上のために」という共通の目的に向かって、報告をする教員と参加する教員が同じ基盤にたつて討論することの意味は大きいと考えられる。このような過程から、自分の研究の内容や方法を広げたり、共同研究が活発になることが望まれる。

教員研修の運営上の課題の一つは、討論を深めることである。2年間の研修会のなかで、討論が深まらなかった会があった。これを単に時間的な制約と片づけ

蛭田他： 本学における教員研修の現状と課題

資料1 大学・短大における教員研修の現状（自己点検自己評価報告書から）

No. 1

大学・短大名	報告書年度	*有無	委員会の名称	教員研修の目的	活動の内容	日程	関連事項
1. 聖路加看護大学	2000	有	FD委員会 (Faculty development)	教員の教育・研究に資する能力の発展と向上を目的とする。	研修会, 講演会の企画運営	1~2回/年 1~5日のプログラム	サバティカル・リープ 公開講座 聖路加看護学会 研究倫理委員会
2. 国際医療福祉大学	2000			個々の教員の研究が教育の質の向上に資するものであるから, 研究活動の活性化に努める。	学内プロジェクト研究の推進, 学内研究発表会	1回/年	地域との連携研究
3. 高知女子大学	2000				学内教育改善推進事業 高知女子大学看護学会	1回/年	地域との連携研究 公開講座
4. 大阪府立看護大学	2000	有	研究研修委員会	教員のファカルティ・デイベロップメントの推進, 研究設備の整備・安全・防災対策	研修報告会 研究発表会	1~2回/年	公開講座
5. 大阪市立大学看護短期大学部	2000						公開講座
6. 京都大学医療技術短期大学部	1996						プロジェクト研究
7. 埼玉医科大学短期大学	2000				看護学科研究懇話会	毎月1回	研究審議委員会
8. 群馬県立医療短期大学	2000						公開講座
9. 京都府立医科大学医療短期大学部	1997	有	看護教育研究委員会		学内教員間の研究交流	学内 セミナー	
10. 岐阜大学医療技術短期大学部	2000		生涯学習への対応				地域社会との連携 公開講座
11. 鹿児島大学医療技術短期大学部	1994						地域との連携 公開講座
12. 自治医科大学看護短期大学	2000	有	研究研修委員会	教員の faculty development (資質開発) 授業内容および方法の改善を図るための組織的な研修および研究	教員研究セミナー 特別研修セミナー (講演会)	毎月1回	公開講座 地域との共催講座
13. 日本赤十字秋田短期大学	1997	有	研究委員会	研究成果の発表, 共同研究の実施, 研究財源の確保			公開講座
14. 日本赤十字愛知短期大学	1999						セミナー
15. 奈良県立医科大学看護短期大学	1999						公開講座
16. 三重県立看護大学	2001	有	研究推進委員会		学内研究会 学術集会	4~5回/年	公開講座 三重七大学公開 セミナー 地域交流研究
17. 兵庫県立看護大学	2001	有	研修研究委員会	教員の研究活動を活性化させ, その資質の向上に必要な研修の機会を確保する	研究集会 研修・研究報告会	1回/年 1回/月	公開講座
18. 川崎市立看護短期大学	2001						公開講座
19. 神戸市立看護大学短期大学部	2001	有	学術研究特別委員会				公開講座
20. 和歌山県立医科大学看護短期大学部	1999						公開講座
21. 山梨県立看護大学短期大学部	2001						公開講座 地域共同研究

*有無は, 委員会の有無を表す

資料1 大学・短大における教員研修の現状（自己点検自己評価報告書から）

No. 2

大学・短大名	報告書年度	*有無	委員会の名称	教員研修の目的	活動の内容	日程	関連事項
22. 宮崎県立看護大学	2000	有	看護研究研修センター	研究活動の活性化	研究会	4～5回/年	公開講座
23. 藤田保健衛生大学	2001						藤田医学会
24. 徳島大学医療短期大学	2000						公開講座
25. 島根県立看護短期大学	2000	有	学術委員会				地域解放事業
26. 三育学院短期大学	1998						
27. 静岡県立大学短期大学医学部	1998						
28. 順天堂医療短期大学	1998				研究懇話会, 講演会 ワークショップ	4～5回/年 1回/年	公開講座
29. 聖隷学園浜松衛生短期大学	2000		* 報告書は授業評価・相互評価の調査結果				
30. 天使女子短期大学	1999		* 報告書は教員の研究活動に関する調査報告				
31. 石川県立看護大学	2000	有	研究・紀要委員会	教員がお互いの研究やライフワークについて知り合い, 今後の研究協力に役立てる	石川県立看護大学学術発表会(学内)	年4回 全教員が発表	
32. 十文字学園女子短期大学	2000	有	社会情報学部論叢委員会	教職員の研究活動についての相互理解の不足を補い, 教職員の親睦をはかる	フォーラム十文字(研究集会)	年2回定期 全教職員対象	
33. 関西女子大学	2001	有	短大セミナー運営委員会	教育方法と研究の展開上で, 相互理解を深め合う	短大セミナー特別セミナー(講演会)	年4回	
34. 大谷女子短期大学	1998		* 報告書は教育研究に関する調査, 学生による授業評価, 教員による授業の自己点検の結果	Faculty Development すなわち教員が所属大学における自己の義務を果たすために必要な専門的能力を自主的に形成し改善する			地域との連携研究 公開講座
35. 華頂短期大学	2000			Faculty Development	教材研究		
36. 大阪信愛女学院短期大学	1999						公開講座
37. 松蔭女子学院短期大学	1995	有	学術研究会委員会		学術講演会 学術研究会		公開講座
38. 東北科学技術短期大学	1997						公開講座
39. 甲子園短期大学	2000	有	研究部	Faculty Development の企画・運営			
40. 聖マリア学院短期大学	1996				聖マリア医学会研究会	年2回	公開講座
41. 成安造形短期大学	1998	有	総合芸術研究所	造形芸術に関する研究・制作・調査および研究を行い, 成果を教育活動の発展に資する			公開講座
42. 東大阪短期大学	2001				同和教育研究特別講演	年1回 年1回	
43. 青葉学園短期大学	1991		* 報告書は授業評価の調査結果				
44. 平安女学院短期大学	1996	有	教育研究所	教員の多様な研究・研修活動を互いに交流して, 研究と教育に活かす	研究集会 研修・研究報告会	年1回 月1回	公開講座

* 有無は, 委員会の有無を表す

蛭田他： 本学における教員研修の現状と課題

資料1 大学・短大における教員研修の現状（自己点検自己評価報告書から）

No. 3

大学・短大名	報告書年度	*有無	委員会の名称	教員研修の目的	活動の内容	日程	関連事項
45. 相愛大学	1996						大学独自の公開講座 地域との共催による公開講座
46. 関西外国語大学	2000				教育研究報告会 全国規模の学会・研究会		市民大学講座
47. 京都大学 総合人間学部	1994		* 報告書は「全学共通科目についてのアンケート調査」結果の報告				
48. 大阪医科大学	1999		* 報告書は講座別研究業績				

*有無は、委員会の有無を表す

することはできない。研修委員は司会の未熟さを反省している。草間（1996）は、研究発表の目的は研究に対する批判を受けることであるから、質問にせよ討論にせよ聴衆から何の発言もないことは演者にとって悲しいことであると述べている。報告者は意見や批判を歓迎する姿勢を持つことが必要であり、聴衆は報告された研究に関心を持ち、研究の苦勞に敬意を払いながら建設的な意見や批判を述べるといふ態度が必要である。司会者には、演者と聴衆を結びつけ会場からの発言のきっかけをつくるという大きな責任がある。討論を深めるためには、演者、聴衆、司会者の3者が討論の技術に熟練することが必要と考えられ、これは経験を積むことによって得られると考えられる。そのために、教員研修会を討論の訓練の機会とすることが望まれる。

今後の教員研修に期待されることの一つは、学内で編成されたプロジェクトチームによる共同研究を推進することではないかと考えられる。教員研修会の報告から、本学教員の持つ研究手法の豊富さがわかり、研究内容を統合する可能性も示されたように考えられる。たとえば、教員研修委員会が中心となり、共同研究のテーマやチームメンバーを募集し、研究活動を調整する体制を作ることなどが考えられる。専門領域の垣根を超えて一つのテーマに取り組むことによって、教員が互いに啓発しあい、研究や教育の能力を開発できることは言うまでもない。何よりも帰属意識が高まり、信頼関係が深まることが期待される。

教員研修会を「faculty development」の方策の一つと考えると、藍野学院の建学の精神に基づいた藍

野学院短期大学の看護教育の発展のために、教員が教育研究の資質を一層向上させる機会と捉えることができる。

謝 辞

本学教員の皆様に対して、2000年度、2001年度の教員研修会に参加し協力いただきましたことに深く感謝申し上げます。本報告の作成に当たり、本学学長堺俊明教授、本学客員教授・大阪市立大学名誉教授増田芳雄先生から、多大なご指導を賜りましたことに深く感謝申し上げます。

引用文献

- 舟島なをみ, 安齋由貴子, 中谷啓子: 過去5年間の看護学教育研究の動向と今後の課題, 看護教育 35: 392-397, 1994
- 草間 悟: 勉強・研究・発表の技法, 南江堂, 1999
- 南 裕子: 看護研究の今後の課題, 井上幸子, 平山朝子, 金子道子編, 看護学大系 10, 看護における研究, 日本看護協会出版会, 1991
- 森脇道子: 短期大学の教育研究改革への取り組み, 平成10年度 21世紀の短期大学像をめぐる研究会報告書, 短期大学基準協会, 短期高等教育研究会, 1998
- 日本看護協会: 看護婦の責任と倫理, 日本看護協会出版会, 2000
- Polit, D. F. and Hunger, B. P.: Nursing Research, Principles and Methods, Lippincott, Philadelphia, New York, Baltimore, 1991
- 吉田洋二: ファカルティ・ディベロップメント, 教育に対する評価とその活用, からだの科学増刊: 31-34, 2002